

## 印象15編 —2021年6月の総評に代えて

○林 桂○

\*最後の作者名の確認は、答え合わせのような不思議な感覚である。今回も15編中5編が、まちりこ氏で、思わずうなった。同一作者とは想像しない作品に、同氏の名があったからである。事前に名を調べて選べば、自ずからバランスを取ろうとする力が働くかもしれないが、名を伏せての選ゆえに生まれてしまう。氏の多彩な世界の術中にはまっている。かつて春町美月氏の作品にも同じような経験をしたことがあった。

●水越 晴子●(三重県)

南天は  
さかさまに  
墜ちちてしまうのか

\*ここでの南天は、植物のナンテンの実でいいのだろうか。あるいは、南の天そのものかもしれないとも疑う。縁起物とされるナンテンに逆さまに墜ちるイメージを結ぶだけで、多様な意味が生じるだろうか。ともあれ、不思議なイメージだ。

●ヒロミヤカザル●(京都府)

喉に銀河を飼っている

\* 寺山修司の「悲しき自伝」の一節「おに、みづからの胃の穴に首さしいれて深さはからむとすれば、はるか天に銀河見え、ただ縹渺とさびしき風吹けるばかり」を思い出す。見えざる身体の内側には、別の世界が眠っている。

● まちりこ ● (埼玉県)

暑い日に独り住まいの母思う

\* 俳句を書きはじめた中学生のような印象である。ただ、「口語詩句」のような場で接すると、深慮を感じる。子どもが独立した母は、長い独り暮らしの老後を生きている。「暑い日」に、その姿を思い浮かべる子どもがいる。これは、それに見合った拙い文体で書くことで、その思いに真実味が込めようとしたのではないかとも思うからだ。

● まちりこ ● (埼玉県)

不確かな明日が靴の底で眠る

\* 明日行動を共にする靴の底には、既に不確かな明日が眠っている。靴底に予め存在する不安を持ち歩くような一日が待っている思いだ。不確かな明日を靴に投影して感じている。

● 豊富 瑞歩 ● (茨城県)

明らかに厚さの違う赤本を  
隣り合わせで解いていた場所

\*「赤本」は、教学社の大学の過去問題集をさす。大学や学部によって、そのボリュームが違う。過去問の範囲も3年、5年、10年のように違う。一般的に、いわゆる難関と言われる大学の方が、その年数も長く、当然厚くなる。恐らく大きく難易度の違う大学の過去問にそれぞれ向かいながら、一緒に受験期を過ごした友がいたのである。各々の進路選択や学力の違いを受け入れながら、二人の友情は何も影響を受けはしない。二度と戻れないその「場所」を回顧する。もっとも、昔の定番だった図書館などから、「スタバ」や「マック」に、「場所」は変わっているらしいのだが。

● まちりこ ● (埼玉県)

満月に毛布をかけてから眠る

\*もちろん、自分の顔に毛布を被って寝たのである。それは満月に毛布を掛けたように見える。明るい満月が窓から射し眠りにくいほどなのである。

● 翠 ● (東京都)

ワンピースは  
いつも長くするの  
空から落ちこちてくる  
子どもたちを包むため

\* 長い裾のワンピースがお気に入りの女の子。学齢期より前か。その理由は、裾を持って、空から落ちてくる子どもをいつでも受けとめるポケットを作れるから。現実と空想が渾然とした世界に生きているが、この子どもの優しい思いは紛れもない。

● 門野あおい ● (東京都)

病室の窓の  
空ばかりが夏

\* 代わりばえのしない病室の世界の中で、唯一窓から射し込む光だけが、夏らしい明るさになっている。入院生活も長くなっているのだろう。

● まちりこ ● (埼玉県)

水羊羹に早起きした夏が  
映り込む

\* 「水羊羹」は夏の季語にもなっている。その涼やかな輝きに夏の光がさす。朝の光を感じさせる「早起きした夏」が、一層涼やかさを演出する。

●風船●（東京都）

ケーキ屋の  
砂金のようなマスカラの  
店員さんが親切で好き

\*食物のケーキを扱う身なりとしては、「砂金のようなマスカラ」の店員は、いささか問題のように思える。しかし、それゆえに「親切で好き」には不思議な実感がこもる。

●まちりこ●（埼玉県）

二番目の母が一番好きだった

\*二番目の母は、継母ということになる。生みの親より育ての親というのが、まさにこれだろう。二番目の母となることを選んだ思慮深く、愛情深い人によって大切に育てられたのである。

●風船●（東京都）

校門横の木に生えた  
立派なサルノコシカケの目視が  
日課だった少女時代

\*茸の生えた木は、樹勢の衰えはじめた古木だろう。観察好きな好奇心旺盛な女子とも、孤独な女子ともとれる。恐らく実体験に根ざした作品だろう。

●風船●（東京都）

かさばりますか？ ぼく

\* 人との交流が苦手な人格を端的に表現している。人が、自分をどう思い、どう感じているのかに気をつかう。しかし、こう質問ができるらば、まだ救われるだろう。質問さえできない人格もいるだろうから。

●広田 土●（大阪府）

ふわふわ わたがし  
シュモクザメ  
めからうろこ こどく  
くさったパン

\* しりとりである。ひとつひとつは言葉の尻でつながりながら独立している。しかし、「ふわふわ」からはじまった言葉が「くさったパン」へ向かう方向性には、自ずから意味が生まれていそうだ。詩としては、2行目に入れられた「シュモクザメ」が不思議な関係を生んでいる。

●はすた●（富山県）

推敲のない人生を生きている  
香水の匂いがしている

\* 確かに誰の人生にも推敲はない。即興

で一度きりのものである。2行目の「香水の匂いがしている」が、1行目の思いを深く広いものへ展開している。